

わたしの修習時代

紀尾井町：1948－70

湯島：1971－93

和光：1994－

35期

大きな時代の洗礼を受けて



会員 牧野 二郎 (35期)

ロッキード事件、田中角栄氏の裁判傍聴が一番印象的な修習だったように思う。東京地裁の入り口では、その日の田中氏の入廷を前に、カメラマンが壁を作っていた。われわれ修習生が入る度に「カメラテスト」が行われた。いっせいにフラッシュを浴びるなど、生まれて初めての経験であったが、ことの重大さを再確認しながらも、まぶしくもあり、なぜか気恥ずかしくもあった。

裁判傍聴が許されて、法廷へ向かう際、裁判所のエレベータに田中氏が護衛とともに乗り込んできた。直前に乗っていたわれわれは短時間であったが、ご一緒することとなった。田中氏は小柄ではあったが、堂々とし、さらにどことなく親しみも感じられた。いわゆる田中法廷に入ると、大きいはずの法廷が、多くの検事と弁護人でうずまり、おまけに修習生も割り込んでいるのだから、とても狭い感じをうけた。短い間であったが、大きな時代の転換期の中にいる実感をひしひしと感じる修習だった。

そんな時代であったものだから、検察教官の力の入れようも相当だった。確信に満ちた口調で、「巨悪を許さない」と正面を見つめながら、堂々と話す姿は、まぶしかった。不正なものは許さない、という検察官の毅然たる姿は、青年修習生の正義感に見事にシンクロしたものだ。

刑事裁判では、後の最高裁長官になられた島田仁郎判事のご指導をいただいたが、判事の前では、裁判官志望を口に出すことが恥ずかしくなるほど、小さな自分を発見したが、それでもただ、島田判事の裁判官の姿にあこがれていたのが懐かしい。

刑事裁判官にあこがれていたが、裁判実務で検察の正義感に魅了され、二回試験まで迷い続けた。ただ、現実問題として我と我が身を振り返ったときに、己の我侷、身勝手さを知るにつけ、公僕となる覚悟は定まらず、修習の終わり頃になって官をあきらめる決心がついた。仲間に誘われ、幾つかの事務所訪問はしたものの、なぜか魅力を感じることはなかった。

ただ、研修所で刑事弁護のご指導をいただいた表久雄先生（千葉県弁護士会）から、最後の授業で事実認定をめぐり、さまざまな可能性や考え方を語ったとき「君はいい弁護士になるよ」と、にっこりと微笑んでほめていただいたことがあった。そのとき初めて、弁護士になる勇気をいただいたように思う。

あの当時は、法科大学院という制度は無く、合格後に2年間、じっくり指導をいただき、職業人となることの重大性を身にしみて理解できる仕組みであった。私の修習生時代は、歴史の激動を体感しつつ、私の弁護士としての人生観を育んだ時代であったように思う。

私が研修所に通っていたころ、かわいいおかつぱ頭の幼児であった息子が、いまや修習生になり、毎日実務修習先や研修所に通い、夜遅くまで勉強している。夜遅く、議論を吹っかけられ、あたふたしてしまうが、対等に議論ができることがうれしくもあり、頼もしくも思う。彼らは、我々の時代の2年間の研修を、1年間で詰め込むのだから、それは大変だろう。厳しい研修になっていると聞かすが、実務の厳しさをぜひ体感し、職業人としての覚悟、矜持を培ってほしい。この1年で、私とは違う新しい法曹としての修習の成果が出ることを楽しみにしている。